

# 新学習指導要領に対応した中学生のための博学連携へのアプローチ — 郷土への理解を深める試み —

坪井 龍太・水谷 悟

## 1 はじめに

中学校で新学習指導要領（2008年告示）が全面実施された今年度、東洋英和女学院中高部教諭水谷悟と同大学教職課程担当准教授坪井龍太が協同し、新学習指導要領に対応した社会科の指導内容と指導方法を研究することとした。新学習指導要領における社会科の改訂は、(1) 基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得、(2) 言語活動の充実、(3) 社会参画、伝統や文化、宗教に関する学習の充実が要点として謳われているが<sup>\*1</sup>、本稿ではそのうち伝統や文化に関する学習の充実に焦点を絞り研究を進めた。また広範な通学エリアを持つ私立学校の生徒に対し、「郷土の現状と歴史について、正しい理解に導く<sup>\*2</sup>」ための教育はどのようにすれば可能となるのか、模索することにした。

本研究においては、東洋英和女学院中学部（以下、本校）の1年生社会科の夏休みの宿題に注目し、「地元の歴史館、博物館から学ぶ」ことを課題として設定した<sup>\*3</sup>。そして、1年生全192名の提出物を鳥瞰するところから、生徒の郷土意識の範囲や濃淡を概観し<sup>\*4</sup>、分析をスタートすることにした。

また分析の枠組みを得るために、2012年8月1日に任意の生徒参加による国立ハンセン病資料館と多磨全生園を見学する「みんなで一緒に行くコース」を設定した。つまり坪井・水谷の引率の下、生徒を観察しながら、また坪井・水谷が生徒とともに学ぶスタンスを取って見学し、そのレポートを分析することにより、192名の生徒の提出物を分析する際の枠組みを得た。当日は、5名の生徒の参加があった。そのうち、4名が国立ハンセン病資料館と全生園の見学についてレポートを提出した。その4つのレポートを精読すると、後述するように、①現地スタッフ（多くの歴史館、博物館では学芸員に該当する）から学ぼうとしたレポート、②自分の祖父の記憶をよみがえらせるなど、世代間の記憶をさかのぼることも含め、地元の再発見をしているレポートが一つの特徴として見えてきた。

そこで、本研究では、この2つの点に絞り、192名の提出物を再精査した。そして、近年の教科教育学でその重要性が指摘されている質的分析を行う前段階の処理として、それらの特徴のあるレポートを加工することなく、再現することとした。つまり本稿は、今後継続する坪井、水谷の新学習指導要領に対応した指導内容と指導方法の研究の端緒となるものであり、今後の研究の仮説を生成することを目的にしている。

生徒の個人情報保護を図るために、レポートの再現にあたっては、個人を特定できないようにするのは当然であり、192名の生徒の訪問先も、生徒が「地元」と申告してきた地域を50音順に並べ替えてあり、学級ごともしくは出席番号順ではない。192名の生徒の訪問先を網羅することから、都心の私立学校に通う生徒たちの地元意識を垣間見ることができればと考える。(坪井)

## 2 夏休みレポートの内容とねらい

現在、本校の社会科では、第1学年に配当されている歴史的分野において、生徒たちに夏休みの期間を利用して歴史館や博物館を訪問し、見学した内容に基づくレポートの作成を課している。これは、本校で実施しているノートづくりの工夫の奨励や定期試験における論述問題の出題<sup>55</sup>とは異なる角度から、新学習指導要領で重視されている思考力・判断力・表現力の育成を促すための重要な試みの一つである。なぜなら、レポート作成に至る体験を通じて、生徒たちは、「教科書・資料集を用いて、講義形式で進める<sup>56</sup>」のを原則としている通常授業ではなかなか獲得しづらい、歴史的な事柄に主体的・能動的に関わる学習姿勢を身につけることができるからである。そこで本稿では、2012年度の第1学年に対して実施した夏休みの課題レポートを事例に、生徒たちがどのような展示を見学し、そこで何を獲得することができたのかを分析し、本校における伝統や文化、郷土に関する学習の一実践を提示することとしたい。まずは、今年度の第1学年の生徒たちに実施した歴史のレポートの課題および作成上のルール・書式・分量を以下に示すこととする。

### ◇課題

・自分の「地元」にある博物館・歴史館・資料館などを訪れ、地元の歴史に関する展示を見学して、①～⑤に従って、レポートを書こう！

- ①いつ、何という施設を訪れたのか、そして、どのような展示を見学したのかを記録しよう。
- ②その地域に貢献した歴史上の人物（または地元に住んだ人々）を選び、貢献の内容を説明しよう。
- ③その人物（または人々）の絵を描いてみよう。
- ④その人物（または人々）が、今を生きる私たち（英和生）に、どんなことを伝えておきたいと思っているだろうか。その人物（または人々）の気持ちがわかるように、過去から現在に向けての手紙形式の文章を作ってみよう。
- ⑤ここで学んだことを踏まえて、④に対する「返事の手紙」を自分の言葉で書いてみよう。

### ◇作成上のルール

- ・レポートは、箇条書きや年表ではなく、文章で書くこと！
- ・レポートの文章は、自分の言葉で書くこと！
- ・参考にした本などがあれば、著者名・本の題名・出版社・刊行年を書くこと。

### ◇レポートの書式・分量

- ・用紙は、指定のレポート用紙（別に配布・B5サイズ）に横書きで書くこと。勝手に行を空けたり、字を無駄に大きく書くことがないように！
- ・分量は、表紙を入れて6枚以上、項目ごとに1枚以上は書くこと。
- ・一枚目は表紙とし、地元の地域名・訪れた施設名・ポスターのタイトル、そして、クラス・番号・名前を書くこと。
- ・二枚目以降は、レポート用紙の上段に、課題の番号と内容を記してから書くこと。
- ・各レポート用紙の右下にページ数を書き込むこと。
- ・レポート用紙の上2カ所をホッチキスでとめること。

本校で、例年、第1学年の夏休みの期間を使い、各自で資料館や博物館を訪問し、それぞれの見学内容にもとづいてレポートを作成させている主なねらいは、学校以外で歴史を主体的に学ぶことに置かれている。すなわち、どのようなリテラシーを身につけることができるか、いかに歴史の「学び方」を学ぶことができるか、ということである。今回は、そのねらいをより一層明確にするために、「自分の「地元」にある博物館・歴史館・資料館」という条件を加えた。これは、本校が中高一貫の私立の女子校であるがゆえに、生徒たちがそれぞれの生活圏を離れて通学している場合が多いことを考慮し、彼女らに自分が生まれ育った郷土（＝自分の「地元」）と向き合い、その歴史について考える機会を与えることをめざしたものでもある。特に課題②は、自分の住んでいる地域の発展に貢献した歴史上の人物（または人々）を選び、その内容を説明することで、生徒たち自身が「郷土」を再発見することを企図している。また、そこには、そもそも自分の「郷土」をどのように認識しているのか、実際に居住している地域と「郷土」と認識する場所にどれ位の幅があるのかという問題も含んでいる。

加えて、課題④・⑤として、「郷土」の歴史に貢献した人物（または人々）と生徒本人との「手紙」の往還をさせたのは、歴史を学ぶ上で大切な、過去を「追体験」することを実践させるためである。課題④は、しっかり歴史上の人物になりきって手紙を書くことができているか、書中の言葉遣いや時代感覚を示す表現などに注目することで、過去と現在の違いに対する認識が反映されているかが確認されるだろう。また課題⑤は、④の手紙に対し、現代に生きる中学生として答えることができているか、調べた内容に基づいて歴史上の人物を演

じながら、自ら設定した問いかけに答えることができているか、特にその目線の置き方に着目するならば、生徒自身の現在に対する認識や理解のあり方が見えてくると思われる。架空の「手紙」を書くことを通して、生徒たちは「現在」から「過去」を理解するだけでなく、「過去」から「現在」を理解することの難しさや大切さを実感し、歴史との向き合い方を学ぶことができるのではないだろうか。(坪井・水谷)

### 3 「みんなで一緒に行くコース」の実施

ところで、今回のレポート作成で欠くことのできない、自分の「地元」にあるはずの歴史館や博物館がない場合はどうしたらいいのだろうか。多くの場合は、存在しないのではなく、発見できていないだけなのだが、近年、高層マンションなどが急速に建設された新興住宅地に住んでいる場合などは、その地域の歴史がいまだ明確な形で提示されていないことも考えられる。また、中学入学前後に自宅が引っ越しをした場合など、生徒本人が自分の「地元」と認識する場所と現在住んでいる地域が必ずしも一致しないこともあり得る。そこで、前述の通り、分析の枠組みを得る目的も達成するために、坪井・水谷と一緒に同じ見学をした上でのレポート提出を期待した「みんなで一緒に行くコース」を以下の通りに設定し、希望者を募ってみることとした。

日時：2012年8月1日（水）午前10時～午後2時

場所：国立ハンセン病資料館

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13 / TEL 042-396-2909

交通：西武池袋線 清瀬駅南口からバスで約10分

その結果、第1学年に在籍する5名の生徒が希望してきた。参加した生徒たちに事情を聞いてみると、彼女たちの多くは、すでに小学校の「生活科」の授業などで、居住地近くの歴史館・博物館を探したが相応な施設が見つからなかった。もしくは、施設には訪問したが、「地元」の歴史について詳しく知ることができるような展示がなかったということであった。以下、その概要を示し、参加者のレポートの一部を紹介したい。

8月1日（水）午前9時30分、西武池袋線・清瀬駅南口の改札前で集合した。参加予定5名の生徒は時間通りに到着し、引率の坪井、水谷とともに、計7名で9時38分発の「久米川駅行き」の西武バスに乗り込んだ。10分ほどで目的の「ハンセン病資料館」に到着し、バスを降りた。バス停近くのヒイラギの木の意味を坪井が説明しながら、資料館まで歩いた。

資料館では、国立療養所多磨全生園に歯科医長・厚生労働技官として勤めておられる宇野公男先生が私たち一行を温かく迎えて下さった。研修室に通され、そこで資料館・全生園の

概要をうかがった。国立ハンセン病資料館は、ハンセン病に対する正しい知識の普及啓発による偏見・差別の解消と患者・元患者の名誉回復を図る目的で、1993年6月開館の高松宮記念ハンセン病資料館をもとに、2007年4月にリニューアルオープンされた博物館である。普及啓発・情報・交流の拠点として、資料の収集保存や調査研究活動などを行い、それによって得られた成果を常設展示および特別展示という形で一般に公開しているという。

それから多磨全生園に住む平沢保治さんを取り上げたアニメーションDVDを約30分間鑑賞した<sup>7)</sup>。平沢さんは13歳で発症し、1941年に14歳で多磨全生園に入園した。そこで、1931年制定の「癩予防法（旧法）」にもとづいて国による「終生隔離、患者撲滅政策」が強制されていた過酷な時代を過ごした<sup>8)</sup>。戦後も1953年制定の「らい予防法（新法）」により強制隔離を固定化しようとする国の政策のため限られた生活を強いられ続けた。長く多磨全生園の入所者自治会長を務め、療養所の生活改善運動をはじめ、園外の障害者団体との交流など幅広く活動してきた。1996年に「らい予防法」が廃止されると、1999年より東京地裁で「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」の原告の一人として元患者に対する補償を訴え、2001年に勝利した。現在、国立ハンセン病資料館運営委員を務めるかたわら、「語り部」として各地で講演活動を行っている。そうした内容を踏まえながら、改めて宇野先生からハンセン病という病気に関する医学的・科学的な説明、および近代日本においてハンセン病患者たちが歩んできた歴史の話を聞いた。

ハンセン病は、「らい菌」を原因とする感染症の一種である<sup>9)</sup>。1873年、ノルウェーの医師アルマウェル・ハンセンによって発見され、彼の名前から「ハンセン病」と名づけられた。「らい菌」は非常に感染力が弱く、生活環境の悪い場合に初めて発病する。したがって、現代の生活環境ではほとんど発病することはないが、皮膚や末梢神経などが冒される病気で、末梢神経が冒されると痛みや暑さを感じることができなくなり、気づかぬうちに怪我や火傷をしてしまうことがある。また、手足の血の循環が悪くなったり、体毛や毛髪が抜けてしまったりすることもある。さらに、運動の障害や視力障害を伴うこともあるため、診断や治療が遅れると、おもに指・手・足などに知覚麻痺や変形をきたすことがある。そのため、高齢な元患者の多くは、有効な治療薬のない時代に病気が進み、手足の変形や皮膚や知覚に後遺症が残っているため、現在もそれらの治療を受け続けている。

1947年に治療薬プロミンが国内で使用されるまで、有効な治療方法がなかったため、一度発病すると病気が進んでしまい不治の病だと考えられていた。また、国が患者を強制的に療養所へ入所させたり、患者の暮らしていた家を消毒したりしたため、「伝染性の強い病気」「怖い病気」という誤ったイメージが植え付けられてしまった。その結果、患者たちは基本的人権も認められず、社会から徹底的に隔離され、患者本人のみならずその家族に及ぶまで、きわめて厳しい差別を受けてきたという歴史を持っている。



2001 年、国が「ハンセン病問題の早期かつ全面的な解決に向けての内閣総理大臣談話」を発表し、「ハンセン病補償法」が成立した。さらに 2006 年に同法が改正され、旧植民地の回復者にも補償が決定した。だが、回復者とその家族に対する根強い偏見と差別は完全に解消されたとは言えない状態である。日本全国に 15 の療養所（国立 13 ヶ所、私立 2 ヶ所）が置かれているが、患者の多くは、かつて受けた差別の厳しさや病気に対する理解度・認知度の低さを考慮し、治療が済んだ後も自分の生まれ故郷には戻らない場合が多いそうである。

説明をうかがった後、宇野先生に解説してもらいながら資料館を見学した。展示は、展示室 1～3 に分けられている<sup>\*10</sup>。展示室 1 では、日本のハンセン病をめぐる歴史が、国の政策を中心にして概観できるようになっていた。展示室 2 では、治療薬ができる前の時代を中心に、療養所の中の患者がいかに過酷な状況下で生活していたのか、その実態を 9 つの側面から紹介していた。「籟」と宣告されて親元や生まれ故郷を離れ、収容されていく患者たちの気持ちは察するに余りあるが、それ以上に、実際に収容された場所で患者たちがきわめて酷い扱いを受けていた事実には驚愕と憤慨を覚えた。特に療養所に実際に設置されていたという「独房」に生徒たちと一緒に入らせてもらったのだが、その暗さや狭さは死を予感させるに十分な圧迫感に満ちていた。息が詰まるような感覚に襲われ、味わった者にしかわからない恐怖や悲慘さを実感できる貴重な機会を得られた。展示室 3 は、過酷な状況生き抜いてきた患者・回復者の姿を示していた。ここには、実際の患者さんたちのインタビューがビデオ鑑賞できる「証言コーナー」が設置されており、生徒たちはタッチパネルで話を聞く相手を選んで、熱心にその証言に耳を傾けていた。

すべての展示を見終り、展示室を出る間際、宇野先生が「あなたの「やさしさ」を信じて」と題する額を指さし、その最後に位置する次の文に心を向けることを勧められた。

この場所を訪れた記憶とともに、その思いをどうか大切にしてください。

そしてぜひ、再び足を運んでいただきますようお願いしております。

その時にもあなたは、家族を、そして自分の大切なつながりをすべて奪われた人びとの思いに共感されることでしょう。

あなたのそのやさしさが、きっと誰かのなぐさめになり、支えになると期待しております。

その後、資料館を出て、食堂で昼食のカレーを食べてから、今度は多磨全生園内の見学を行った。全生園は、もとは 1909 年 9 月 28 日、公立療養所第一区府県立全生病院として現在の地に創立された医療機関である<sup>\*11</sup>。それが 1941 年 7 月 1 日に厚生省に移管され、国立療養所多磨全生園として発足した。武蔵野の雑木林に包まれた緑地の多い静かな自然環境の

なかに立地し、敷地面積は 352796 m<sup>2</sup>、建物面積が 41262 m<sup>2</sup>（延べ 50452 m<sup>2</sup>）である。病床数は通知定床 658 床、医療法定床 889 床で、現在もなお、ハンセン病後遺症の苦しみへの対応と高齢化による多くの疾患の予防・対処に当たっている。園内には、治療棟やリハビリ訓練棟などの病棟は勿論のこと、売店・レストランや郵便局、寺院や教会堂など患者さんの生活に必要な施設があり、さらには公会堂や囲碁・将棋会館などの交流の場、テニスコートやゲートボール場などの娯楽用施設なども備えられている。一見すると、生活に必要な環境がすべて整っているようにも思えるが、それはかつて社会から完全に隔離され、園内でしか生活が成立しなかったハンセン病患者たちの厳しい境遇を反映していると言える。なかでも園内の南端に位置する「望郷の丘」は、かつて小高い丘の上から患者たちがもう帰ることのできない故郷に思いを馳せて、園外の世界を眺め、望郷の思いに涙する場所であったという。いまは周囲にすっかり高い建物が建ってしまっているが、全生園の歴史を追体験することができる貴重な場であった。こうして園内を 1 時間半ほどの時間をかけて歩き、午後 2 時 30 分のバスで清瀬駅に戻り、およそ 4 時間半にわたる見学を終えることとなった。

「みんなで一緒に行くコース」に参加した 5 名のうち、4 名が国立ハンセン病資料館・全生園についてレポートを提出した。そのうちの 1 名が「東京都清瀬」を地元と申告しているが、その生徒のレポートが 4 名の中で最も秀逸であると、坪井、水谷ともに評価している。地元意識によって、学習が深化したのかどうかは不明であるが、今回の研究テーマの設定に一定の示唆を与えるものである。その生徒を含め 2 名の生徒が宇野先生から説明を受けたことをレポート内に明記している。

例① 私は 8 月 1 日（水）に「みんなで一緒に行くコース」に参加し、国立ハンセン病資料館と多磨全生園を訪れた。先に向かったのは国立ハンセン病資料館だ。そこではまず、宇野先生という全生園で歯科医をなさっている方の紹介があった。（中略）昼食をはさんでから、全生園を訪れた。全生園の中には教会やお寺もあった。又、一人のハンセン病の後遺症を患っている方とお話をする事ができた。その方は、目は全く見えず、唇にも力が入らなくなっていた。今は、老化のせいで耳が遠くなっているが、昔は職員の足音で誰が来たのかがわかるほど、かんがするどかったそうだ。それに全生園で一番長く過ごしているそうだ。

また、「東京都清瀬」を地元と申告している生徒は、自分の祖父と祖父の父をレポートに登場させている。

例② 実は私の祖父が全生園に入ってはいけないという頃に、入ったことがあるんです。

なぜかという、祖父の父が全生園の建築の仕事をしていて、一緒に連れていってもらったからだそうです。その上、私の祖父の父はハンセン病が簡単にうつらないことを知っていたらしいです。全生園に入った時、祖父はまだ子どもで、それなのに自分と同じくらいの子がいてとショックを受けたと話してくれました。私は、祖父の父と一度も会ったことがないのですが、差別をしていないと分かって、なんだかよく分からないけれど、うれしくなりました。

このレポート記述が、今回の分析枠組みの設定に大きく貢献することになった。(水谷)

#### 4 レポートの集計結果

では、生徒たちは自分の「地元」としてどのような範囲をイメージし、どこの歴史館・博物館を訪れてレポート作成に取り組んだのだろうか。考察していこう。【表1】を見てみると、学年＝全192名のうち、「地元」として認識されている地域は、都道府県別で、東京142、神奈川14、埼玉12、千葉15、その他9（愛知2、京都1、佐賀1、静岡1、栃木1、長野1、広島1、北海道1）であった。東京都内での本校の位置に加え、最寄り駅が六本木（東京メトロ日比谷線・都営大江戸線）と麻布十番（東京メトロ南北線、都営大江戸線）であることから、東京以外では神奈川の割合が高いことが予想されたが、集計した結果は、神奈川・埼玉・千葉に大差はなく、ほぼ均等の人数（12～15名）であった。東日本大震災の影響からか、例年に比べて、居住地が本校に近い生徒の割合が高くなったように思われる。また、「その他」は、夏休み期間の多くを保護者の実家などで過ごすという理由から、自分の「地元」を実際に住んでいる地域とは違う場所を選ぶことを特別に認めた生徒たちである。

東京都内では142名のうち、区内138名・市部4名であり、23区内では、本校の位置する港区が21名と最も多く、以下、世田谷区17名、目黒区14名、渋谷区12名、文京区11名と続いていく。また、生徒たちが訪問した施設別で見ると、港区立港郷土資料館および世田谷区郷土資料館が11名と最も多く、続いてめぐろ歴史資料館が10名、文京ふさと歴史館が9名であった。以上の集計結果から、生徒たちが実際に住んでいる地域（住所）と自分の「地元」として認識している地域とを比較すると、その両者が極端にかけ離れてしまっている生徒はきわめて少なく、目黒と世田谷・世田谷と大田などのように、隣接した地域間において認識の広がりが見られる程度であった。

ただし、「さいたま市」だけは、広範囲にわたる市町村合併の影響が出ていると思われる。埼玉12名のうち半数がさいたま市であるが、「地元」の地域に対する具体的なイメージが、他の地域に比べて希薄なようで、地域の発展に貢献した人物の選択にも影響が見られる。6名中3名が「渋沢栄一」を選び、その内容も地域との関係よりも渋沢個人の業績に重きを置



いたレポートになっている。

【表1】は192名の「自分の『地元』」、「訪問した施設名」、「貢献した人物（人々）」の一覧であるが、各項目の記載内容については生徒の申告のまま、整理することにした。自分の地元を都道府県単位で記入してある生徒も、特に指導せず、そのまま記載した。（水谷）

【表1】夏休みレポートの「地元」と施設名・人物名

	自分の「地元」		訪問した施設名	貢献した人物（人々）
1	東京	東京都	一葉記念館	樋口一葉
2	東京	足立区	足立区郷土博物館	鴨下金三
3	東京	足立区綾瀬	足立区郷土博物館	京極弥五郎
4	東京	板橋区	渋沢史料館	渋沢栄一
5	東京	板橋区	板橋区立郷土資料館	高島秋帆
6	東京	板橋区	植村昌陰館	植村直己
7	東京	江戸川区	江戸川区郷土資料室	江戸川の下流の漁師
8	東京	江戸川区	江戸川区郷土資料室	水害と戦った人々
9	東京	大田区	赤毛のアン記念館	村岡花子
10	東京	大田区	大田区郷土博物館	勝海舟
11	東京	大田区	大田区立郷土博物館 大田区立熊谷恒子記念館 国立新美術館	熊谷恒子
12	東京	大田区	品川歴史館 大森貝塚遺跡公園	モース
13	東京	大田区	品川歴史館 大森貝塚遺跡公園	モース
14	東京	大田区池上	赤毛のアン記念館	村岡花子
15	東京	大田区大森、西馬込地区	大田区立郷土博物館	村岡花子
16	東京	大田区（多摩川沿い）	川崎市市民ミュージアム	徳川家康
17	東京	大田区馬込地区	大田区立郷土博物館	宇野千代
18	東京	葛飾区	葛飾区郷土と天文の博物館	青山士
19	東京	葛飾区	葛飾区郷土と天文の博物館	遠山綱景
20	東京	葛飾区	葛飾区郷土と天文の博物館	足利義氏
21	東京	北区	渋沢資料館	渋沢栄一
22	東京	清瀬市	国立ハンセン病資料館・多磨全生園	山口シメ子
23	東京	江東区白河	江東区深川江戸資料館	伊能忠敬、松平定信 伊東甲子太郎
24	東京	江東区深川	江東区深川江戸資料館	伊能忠敬
25	東京	江東区深川・砂町	江東区深川江戸資料館	長屋に住む人々
26	東京	品川区	泉岳寺 品川歴史館	大石内蔵助
27	東京	品川区	品川歴史館	モース
28	東京	品川区	大森貝塚遺跡庭園 品川歴史館	モース
29	東京	品川区	品川歴史館	品川っ子

30	東京	品川区	品川歴史館	西村勝三
31	東京	品川区	品川歴史館	モース
32	東京	品川区	品川歴史館、大森貝塚	モース
33	東京	渋谷区	国立ハンセン病資料館	平沢保治
34	東京	渋谷区	白根記念渋谷区郷土博物館・文学館	高野辰之
35	東京	渋谷区	白根記念渋谷区郷土博物館・文学館	高野辰之
36	東京	渋谷区	白根記念渋谷区郷土博物館・文学館	北原白秋
37	東京	渋谷区	白根記念渋谷区郷土博物館・文学館	北原白秋
38	東京	渋谷区	白根記念渋谷区郷土博物館・文学館	北原白秋
39	東京	渋谷区	白根記念渋谷区郷土博物館・資料館	与謝野晶子
40	東京	渋谷区	世田谷区郷土資料室	豊田正治
41	東京	渋谷区	古賀政男音楽博物館	古賀政男
42	東京	渋谷区上原	古賀政男音楽博物館	古賀政男
43	東京	渋谷区西原	東京都水道歴史館	玉川兄弟
44	東京	渋谷区鉢山町	白根記念渋谷区郷土博物館・文学館	農業を営む人々
45	東京	新宿区	新宿区立新宿歴史博物館	夏目漱石
46	東京	新宿区	新宿区立新宿歴史博物館	夏目漱石
47	東京	新宿区	新宿区立新宿歴史博物館	夏目漱石
48	東京	新宿区	新宿区立新宿歴史博物館	夏目漱石
49	東京	新宿区	漱石山房・新宿歴史博物館	夏目漱石
50	東京	新宿区牛込地区、神楽坂	新宿区立新宿歴史博物館	夏目漱石
51	東京	杉並区	杉並区立郷土博物館分館	井伏鱒二
52	東京	杉並区	杉並区立郷土博物館	内田秀五郎
53	東京	杉並区荻窪	杉並区立郷土博物館	与謝野晶子
54	東京	墨田区本所両国	江戸東京博物館	芥川龍之介
55	東京	世田谷区	世田谷区立郷土資料館	鵜飼をする山田さん
56	東京	世田谷区	世田谷区立郷土資料館	珂碩上人
57	東京	世田谷区	世田谷区立郷土資料館	斎藤寛斎
58	東京	世田谷区	世田谷区立郷土資料館	斎藤寛斎
59	東京	世田谷区	世田谷区立郷土資料館	斎藤寛斎
60	東京	世田谷区	世田谷区立郷土資料館	斎藤寛斎
61	東京	世田谷区	世田谷区立郷土資料館、松陰神社	吉田松陰
62	東京	世田谷区	松陰神社	吉田松陰

63	東京	世田谷区	世田谷区立郷土資料館 世田谷代官屋敷	井伊直弼
64	東京	世田谷区	世田谷区立郷土資料館 大場代官屋敷	大場弥十郎
65	東京	世田谷区	世田谷代官屋敷	大場弥十郎
66	東京	世田谷区	せたがや平和資料室	玉川兄弟
67	東京	世田谷区駒沢	世田谷区立郷土資料館	吉田松陰
68	東京	世田谷区桜上水	世田谷区立郷土資料館	斎藤寛斎
69	東京	世田谷区用賀	世田谷区立郷土資料館	玉川兄弟
70	東京	世田谷区若林	松陰神社	吉田松陰
71	東京	世田谷区（目黒区）	めぐろ歴史資料館、 玉川総合支所、玉川神社	豊田正治
72	東京	台東区	一葉記念館	樋口一葉
73	東京	台東区上野	旧岩崎邸庭園	岩崎久弥
74	東京	中央区佃	タイムドーム明石	徳川家康
75	東京	中央区佃	石川島資料館	平野富二
76	東京	中央区日本橋	江戸東京博物館	日本橋の町人たち
77	東京	中央区日本橋	タイムドーム明石 中央区立郷土博物館	長谷川時雨
78	東京	中央区日本橋小伝馬町	伝馬町処刑場跡	吉田松陰
79	東京	千代田区	千代田区立日比谷図書文化館	徳川家康
80	東京	千代田区	千代田区立日比谷図書文化館	玉川兄弟
81	東京	千代田区	千代田区立日比谷図書文化館	滝廉太郎
82	東京	千代田区	千代田区立四番町図書館 千代田区一番町六番地 ライオンズマンション	滝廉太郎
83	東京	豊島区巣鴨	豊島区郷土資料館	伊藤伊兵衛
84	東京	豊島区巣鴨	豊島区郷土資料館	伊藤伊兵衛
85	東京	中野区	中野区立歴史民俗資料館	中島菊夫
86	東京	中野区	中野区立歴史民俗資料館	中島菊夫
87	東京	中野区	中野区立歴史民俗資料館	中島菊夫
88	東京	中野区新井	国立ハンセン病資料館	アルマウエル・ハンセン
89	東京	西東京市	西東京市郷土資料室	井口忠佐衛門
90	東京	練馬区	練馬区役所	上野徳次郎
91	東京	練馬区	練馬区立石神井公園 ふるさと文化館	手塚治虫
92	東京	練馬区	練馬区立石神井公園 ふるさと文化館	太田道灌
93	東京	練馬区石神井町	練馬区立石神井公園 ふるさと文化館	照姫
94	東京	練馬区石神井町	練馬区立石神井公園 ふるさと文化館	池上彰

95	東京	日野市	日野市立新選組の ふるさと歴史館	近藤勇、土方歳三
96	東京	文京区	文京ふるさと歴史館	中島歌子
97	東京	文京区	文京ふるさと歴史館	樋口一葉
98	東京	文京区	文京ふるさと歴史館	森鷗外
99	東京	文京区	文京ふるさと歴史館	樋口一葉
100	東京	文京区	文京ふるさと歴史館	夏目漱石、樋口一葉 森鷗外、石川啄木
101	東京	文京区	文京ふるさと歴史館	松尾芭蕉
102	東京	文京区	文京ふるさと歴史館	小川箏船
103	東京	文京区	文京ふるさと歴史館	夏目漱石
104	東京	文京区小石川	小石川後楽園	水戸光圀
105	東京	文京区本郷	文京ふるさと歴史館	相良知安
106	東京	文京区、台東区	三菱史料館 旧岩崎邸庭園	岩崎弥太郎
107	東京	港区	岡本太郎記念館	岡本太郎
108	東京	港区	岡本太郎記念館	岡本太郎
109	東京	港区	岡本太郎記念館	岡本太郎
110	東京	港区	東京タワー	内藤多仲
111	東京	港区	畠山記念館	畠山一清
112	東京	港区	港区立港郷土資料館	福澤諭吉
113	東京	港区	港区立港郷土資料館	森泰吉郎・稔
114	東京	港区	港区立港郷土資料館	福沢諭吉
115	東京	港区	港区立港郷土資料館	尾崎紅葉
116	東京	港区	港区立港郷土資料館	江原素六
117	東京	港区	港区港郷土資料館 慶應義塾大学 三田キャンパス	福沢諭吉
118	東京	港区青山	青山港区立港郷土資料館	青山忠成
119	東京	港区赤坂	港区立赤坂小学校 港区立赤坂子ども中高生プラザ 港区赤坂6丁目10番にある 勝海舟邸跡地	勝海舟
120	東京	港区赤坂	さんさん赤坂	勝海舟
121	東京	港区赤坂	港区立港郷土資料館	勝海舟
122	東京	港区港南	港区立港郷土資料館	勝海舟
123	東京	港区白金台	北里柴三郎記念室	北里柴三郎
124	東京	港区白金高輪	泉岳寺	赤穂浪士
125	東京	港区台場	港区立港郷土資料館	江川太郎左衛門
126	東京	港区高輪	北里柴三郎記念室	北里柴三郎
127	東京	港区～品川区	港区立港郷土資料館	北里柴三郎
128	東京	武蔵野市	江戸東京たてもの園	玉川清右衛門
129	東京	目黒区	日本民藝館	柳宗悦

130	東京	目黒区	目黒雅叙園	湯川秀樹
131	東京	目黒区	目黒区美術館	古茂田守介
132	東京	目黒区	めぐろ歴史資料館	青木昆陽
133	東京	目黒区	めぐろ歴史資料館	青木昆陽
134	東京	目黒区	めぐろ歴史資料館	青木昆陽
135	東京	目黒区	めぐろ歴史資料館	香取正彦
136	東京	目黒区	めぐろ歴史資料館	五島慶太
137	東京	目黒区	めぐろ歴史資料館	徳川家康、前田利為
138	東京	目黒区	めぐろ歴史資料館 八雲中央図書館	オスカル・ケルネル
139	東京	目黒区自由が丘	めぐろ歴史資料館	栗山久次朗
140	東京	目黒区東が丘	世田谷区立郷土資料館	井伊直弼
141	東京	目黒区中目黒	めぐろ歴史資料館	五島慶太
142	東京	目黒区祐天寺	めぐろ歴史資料館	倉片英蔵
143	神奈川	川崎市	川崎市市民ミュージアム	田中休愚
144	神奈川	川崎市	川崎市市民ミュージアム	田中丘隅
145	神奈川	川崎市	町田市立自由民権資料館 常設展 武相の民権	山上卓樹
146	神奈川	川崎市	川崎市市民ミュージアム	持田春吉
147	神奈川	川崎市多摩区	川崎市市民ミュージアム	小泉次太夫
148	神奈川	川崎市中原区小杉御殿	史跡	徳川家康
149	神奈川	川崎市宮前区（多摩田園都市）	電車とバスの博物館 多摩田園都市まちづくり館	五島慶太
150	神奈川	横浜市	神奈川県立歴史博物館	ペリー
151	神奈川	横浜市	横浜市歴史博物館	生麦事件の時代の庶民
152	神奈川	横浜市	横浜開港資料館	マシュー・ペリー
153	神奈川	横浜市	横浜市歴史博物館	吉田勘兵衛
154	神奈川	横浜市	横浜市歴史博物館	吉田勘兵衛
155	神奈川	横浜市港北区大倉山	大倉精神文化研究所 (大倉山記念館)	大倉邦彦
156	神奈川	横浜市港北区菊名	横浜市歴史博物館	吉田勘兵衛
157	埼玉	埼玉県	吉見百穴	つくった人々？
158	埼玉	川口市	川口市立文化財センター	井沢弥惣兵衛
159	埼玉	川口市	埼玉県立歴史と民俗の博物館	渋沢栄一
160	埼玉	川越市	川越市立博物館	太田道灌
161	埼玉	さいたま市	埼玉県立歴史と民俗の博物館	渋沢栄一
162	埼玉	さいたま市	埼玉県立歴史と民俗の博物館	渋沢栄一
163	埼玉	さいたま市	さいたま市立博物館	井沢弥惣兵衛
164	埼玉	さいたま市	さいたま市立博物館	井沢弥惣兵衛
165	埼玉	さいたま市	さいたま市立博物館	井沢弥惣兵衛
166	埼玉	さいたま市	さいたま市立浦和博物館	井沢弥惣兵衛



167	埼玉	深谷市	深沢史料館・晩香廬・青淵文庫	渋沢栄一
168	埼玉	蕨市	蕨市立歴史民俗資料館	高橋新五郎
169	千葉	千葉県	市立市川歴史博物館	伊能忠敬
170	千葉	市川市	市立市川歴史博物館	東山魁夷
171	千葉	市川市	市立市川歴史博物館、 考古博物館	坪井玄道
172	千葉	市川市八幡	市川市歴史博物館	坪井玄道
173	千葉	浦安市	浦安市郷土博物館	浦安の漁師、 熊川好生市長
174	千葉	浦安市	浦安市郷土博物館	地元の漁師たち
175	千葉	浦安市	浦安市郷土博物館	熊川好生
176	千葉	浦安市	浦安市郷土博物館	山本周五郎
177	千葉	浦安市	浦安市郷土博物館	山本周五郎
178	千葉	柏市柏	柏市郷土資料展示室	杉村楚人冠
179	千葉	千葉市幕張	国立ハンセン病資料館	小笠原登
180	千葉	松戸市	江戸東京博物館	徳川家康
181	千葉	松戸市	戸定歴史館 戸定邸	松戸覚之助
182	千葉	松戸市	松戸市立博物館	川上善六
183	千葉	松戸市二十世紀ヶ丘	松戸市立博物館	松戸覚之助
184	愛知	愛知県	犬山城白帝文庫歴史文化館	池田恒興（2代目城主）
185	愛知	豊川市	豊川稲荷・寺宝館	寒巖義尹、東海義易
186	京都	京都市左京区岩倉上蔵町	岩倉具視幽棲旧宅・対岳文庫	岩倉具視
187	佐賀	唐津市	旧唐津銀行	辰野金吾
188	静岡	静岡県	浜松城	徳川家康
189	栃木	日光市	日光東照宮	徳川家康
190	長野	軽井沢追分	堀辰雄文学記念館	堀辰雄
191	広島	広島市	原爆資料館	ヒロシマの被爆者
192	北海道	函館市	箱館高田屋嘉兵衛資料館	高田屋嘉兵衛

## 5 「人」から教わる体験

先に、レポート作成のねらいは、歴史館や博物館などの学校以外で、いかに歴史を主体的・能動的に学ぶことができるかにあると述べたが、そこで展示などを見学し、「学び方」を学ぶ上で重要な役割を果たすのが「人」の存在である。史料館や博物館を訪問する際に、ただ展示を見学するだけでなく、学芸員や解説員に質問をすると、専門的な説明を受けたり、テーマ設定に関するアドバイスをもらったりすることができる。前述した「みんなで一緒に行くコース」で、宇野先生から直接説明を受け、一緒に見学をまわってもらったことで生徒たちの理解は深まり、彼女らが受けた印象は、自分一人で見学した場合に比べて、より鮮明になったことは想像に難くない。そのことからわかる通り、歴史館や博物館に勤める学芸

員や解説員の存在は、生徒たちの理解をより一層深めるために、非常に重要な意味を持っている。そこで本章では、特に歴史館や博物館における学芸員（および、係員・解説員などそれに相当する役割）の存在に注目し、「博物館で『人』から教わった」経験を書けているレポートをいくつか取り上げ、「人」から学ぶことの重要性について考えてみたい。

全 192 名のレポートを読み込んだ結果、上記のような内容が記されていたレポートは、全部で 15 名（各クラス 3 名平均）であり、学芸員に加え、ボランティアの解説員や資料館の関係者（具体的には、村岡花子のお孫さん）も含んで数えた。レポート作成に当たって、特に教員の側から、学芸員の方にお話を聞くように強く促したわけではないので、自主的・自発的に話を聞いた生徒たちがいたことは喜ばしいことである。だが、その人数は決して多いとは言えない。ただし、15 名の中には、学芸員の説明や言葉を紹介したり、一緒に撮ってもらった写真を貼ってあったり、と学んだ内容を分析できるようなレポートも見受けられた。

生徒たちが書いたレポートから、学芸員をはじめとする「人」から学んだ内容を抽出してみると、その特色によって三つのパターンに区別することができる。まずは、自分が知りたい、または調べたい事柄について、わからないことを生徒の方から聞くパターンである。主な例としては、以下の 4 件を挙げることができる。自分の地元、訪問施設、貢献した人物は、すべて生徒からの申告のまま記述する。ただし、レポート中の下線は、要点を示す意味で、筆者が引いたものである。

例①自分の地元「世田谷区（目黒区）」、訪問施設「めぐろ歴史資料館、玉川総合支所、玉川神社」

貢献した人物「豊田正治」

境内には「郷土開発」の偉人「豊田正治翁」の碑などがありました。碑は風雨により字が読めないぐらいに劣化していましたが、神主さんが協力してくださり、何をかかれていたのがわかりました。そこからはどれ程「豊田正治翁」が世田谷に貢献していたのかがよくわかりました。

（中略）

玉川神社では、読めなくなってしまった豊田正治の碑を神主さんに聞くことができ、とても貴重な体験ができました。その碑には「豊田正治翁の徳（素晴らしい行い）を讃える碑の碑文」とはじめに書いてありました。碑には「耕地整理の大事業を完成し、今日の発展につながるものを成しとげた。その功績は翁の名と共にいつの世にも朽ちないほどのものである（一部・現代語訳）」と書いてありました。

例②自分の地元「千葉県浦安市」、訪問施設「浦安市郷土博物館」

貢献した人物「山本周五郎」

浦安市郷土博物館では、漁師さんたちが漁をするときに使っていた、1人乗りの大きな船「べか船」を見学しました。博物館の方に、「なぜべか船は1人乗りなのに船が大きいのですか？」と質問したところ、「1人乗りだけど、乗るのは漁師だから、網とか、いろいろと漁の道具を積むために大きいんだよ」と教えて下さいました。浦安は、漁業の他に海苔づくりが盛んだったので、どろどろの海苔をとるための、のりす、のりあみという道具と、海苔を平たくして乾燥させるための、ヒコーキ包丁などの道具も見学しました。現在の浦安で漁業や海苔づくりが行われなくなってしまった理由を博物館の方に質問したところ、「工場の排水が海を汚染して、貝も魚も海苔もとれなくなってしまい、大好きだった漁業で生活することが困難になってしまった漁師たちは、これからの生活に不安を抱きながらも、1971年に漁業権を全面放棄することにしたんだ。」と教えて下さいました。博物館内にあった、元漁師さんたちのインタビューのビデオに映っていた、昔の漁業について聞かれたときの、元漁師さんたちのなつかしそうで、幸せそうな表情は今でも目に焼きついていて、元漁師の方々がどれだけ漁業が好きだったか、楽しんでいたのかを物語っていると思いました。

例③自分の地元「江東区深川・砂町」、訪問施設「江東区深川江戸資料館」

貢献した人物「長屋に住む人々」

私は町並みが再現されたコーナーに行きました。そこで、ボランティアの解説員さんに色々教えていただきながら、展示を見てまわりました。はじめに見たのは、表店（おもてだな）といわれる大通りを再現した場所です。表店には、米屋や肥料問屋（魚から作る肥料や油を売る問屋）、八百屋が並んでいました。解説員さんのお話によると、表店は大通りなだけに、とても商売がさかんで、物がたくさん売れるので、商人はみな、表店で商売をすることを夢んでいたそうです。

例④自分の地元「板橋区」、訪問施設：「植村冒険館」

貢献した人物「植村直己」

また、板橋区に今回私が訪れた植村冒険館があることで、後世に植村さんの生き方、精神を伝え、そこに訪れた人々がまた次の人に伝え、板橋が出発点になっていることが、板橋区に貢献していると、私は思います。資料館の方の話によると、年間約1万人訪れるそうです。訪れる人は少しずつ増えているそうです。また、何度も訪れる方が多いそうです。また、お母さんが小さな子どもに植村さんのことをお話している姿もよくみ

られるそうです。

次に、学芸員をはじめ、専門的な立場の人にレポートのテーマ設定そのものを相談するパターンである。レポートを書く上で必要な史料の有無について、つまり専門的な意見が必要な場面で助言を求め、それを活かして自分のテーマを発見している様子がかうかがい知れる。なかには、このレポート作成のために訪問した歴史館で、公開期間前にもかかわらず、展示を特別に見学させてもらった生徒もいる。その主な例としては、以下の5件を挙げることができる。

#### 例⑤自分の地元「目黒区自由が丘」、訪問施設「めぐろ歴史資料館」

貢献した人物「栗山久次朗」

私は7月20日に中目黒にある「めぐろ歴史資料館」を訪れ、展示物を見学しました。そこには、目黒にある歴史的なものがたくさんありました。その大部分をしめているのが、目黒新富士にある胎内洞穴の事でした。その胎内洞穴の床下から大日如来像という、小さい像も見つかったそうです。

また、目黒の発展に貢献した人物については、特別閲覧室で学芸員の横山さんという方から資料を見ながらお話をうかがいました。そこでは、沢山の資料があって、どのような人を選ぶべきか、いくつかヒントをもらって、紹介していただいた人を参考に、図書館へ行き、図書館の方々に協力してもらい、何冊もの本を見て、誰にするか決めました。

#### 例⑥自分の地元「渋谷区」、訪問施設「世田谷区郷土資料館」

貢献した人物「豊田正治」

最後に見た展示は豊田正治さん達が行なった事業についてです。その事業は名前を「玉川村全円耕地整理事業」といいます。

この中で私は玉川上水についてか、豊田正治さんについて調べようと思い、資料館の方に「資料が沢山ある方はどちらかきいたところ、「元々、玉川上水はあまり世田谷区には関係がなく、資料は豊田正治さんについての方がたくさんある」と言われたので、玉川村全円耕地整理事業について調べることにしました

#### 例⑦自分の地元「目黒区中目黒」、訪問施設「めぐろ歴史資料館」

貢献した人物「五島慶太」

私が選んだ、歴史上の人物は、「五島慶太」という人です。選んだ理由は、めぐろ歴史資料館に行っても貢献人物が特に見当たらなかったのも、資料館の係員に話を伺った

ところ、この人の話をして下さったからです。(中略)

当時、東京郊外に住宅地をつくりたかったため、まず、住民を呼ぶために努力しました。線路をつくり、電車を走らせ、乗客が増えました。この電車は東横線なので、終点の渋谷駅では東急デパートを作り、何百個という会社を買い取っていきました。また、線路沿いに学校を誘致しました。だんだんと住民が増え、今の目黒区の基盤をつくりました。この街づくりは、阪急電鉄をモデルとして行っていました。阪急電鉄では、小林一三という人が活躍していて、最初、渋谷栄一は、この人に目黒の街づくりを頼んだのですが、忙しくしていたため、五島慶太に任されたそうです。

阪急電鉄では小林一三、東急電鉄では五島慶太が活躍していたので、「西の小林」「東の五島」と呼ばれていたそうです。

#### 例⑧自分の地元「千葉県浦安市」、訪問施設「浦安市郷土博物館」

貢献した人物「熊川好生」

7月28日、私は、「浦安市郷土博物館」へ見学に行きました。見学だけではなく、博物館の方にお話もうかがいました。見学内容は浦安の埋め立てについてです。(中略)

博物館の方から聞いたお話は、ディズニー設立についてです。熊川氏は、三角州を1坪700円でオリエンタルランドに売り出しました。それは漁民の反対もとても多かったそうです。期待とプレッシャーの中、アメリカのウォルト・ディズニー・プロダクションの首脳と会談しました。文章を手渡し何度とない会談の上で、ドン・ティタム会長から「浦安を世界に輝く観光都市にしましょう」との返事をもらうことに成功したのです。私はそれを聞いて、熊川氏は、とても強いプレッシャーの中で、ディズニーランドを浦安に設立することができて、本当に強い人だなと思いました。JR京葉線についてもお話してくださいました。始めは、貨物線として計画されていましたが、住宅地、商業地、流通基地など多様化してきたので、結果、西船橋から蘇我間の旅客化が認可されました。

#### 例⑨自分の地元「文京区本郷」、訪問施設「文京ふるさと歴史館」

貢献した人物「相良知安」

本来は、平成24年10月27日(土)～12月9日(日)が一般公開期間だが、学芸員の加藤元信さんの勧めで宣伝を兼ねて特別に文京ふるさと歴史館3階の研究室にご案内いただき、公開前に展示を見せていただくことになった。

文京区といえば、「印刷、出版のまち」「文人・作家のまち」「大学のまち」「坂のまち」などいくつもの特色がある。その他、病院や製薬会社、医療機器会社が多数存在する「医療のまち」としても有名である。文京区には、東京大学附属病院、東京医科歯科大学附



属病院、日本医科大学附属病院、順天堂大学附属病院、都立駒込病院などがある。1つの区に大きな総合病院がいくつも点在することは珍しいことだと加藤さんからお話をいただいた。

最後に三つ目のパターンは、生徒たちが見学していた時に学芸員や解説員の方から声をかけてくれて、アドバイスをもらったパターンである。その主な例としては、以下の2件をあげることができる。

例⑩自分の地元「大田区」、訪問施設「赤毛のアン記念館」

貢献した人物「村岡花子」

私は、8月1日に大田区にある、村岡花子さんのかいた「赤毛のアン」の記念館、「赤毛のアン記念館」に行きました。その記念館は、一つの部屋のようになっていて、部屋には村岡花子さんが実際に使っていたという机や本や本だながありました。とてもきれいにとっていて、本当にそのままだったので今でもこの机で村岡花子さんが本を訳しているように思えました。しばらくその机やたなを見ていると、村岡さんのお孫さんが本物の「赤毛のアン」を訳してある原稿を見せてくださいました。その原稿には何度も線をひいたりして直したあとがあり、本当に思いをこめて訳していたんだなと思いました。

例⑪自分の地元「大田区池上」、訪問施設「赤毛のアン記念館」

貢献した人物「村岡花子」

私は8月1日に大田区中央にある赤毛のアン記念館・村岡花子文庫へ行きました。赤毛のアン記念館では、村岡花子さんのお孫さんからお話をうかがいました。お話では、おもに村岡花子さんの一生や作品についてうかがいました。花子さんの旧姓は安中で、花子というのはペンネームだそうです。本名は、「はな」で、結婚してから、村岡はなになったそうです。

以上、三つのパターンに区別して、生徒たちが実際に歴史館や博物館を訪れた際に体験した「人」から学んだ内容を示してきた。一般に歴史館や博物館の展示は、説明の文章が幅広い世代の人たちに向けて作られており、また当然のことながら、その内容は、生徒たちが求めているテーマに直接応えてくれるとは限らない。それに比べて、学芸員や解説員は、専門的な立場から、中学生にわかりやすい言葉で、また生徒の興味・関心や理解の度合いに応じて、ふさわしい事例を挙げて説明してくれることがわかった。したがって、そこから生徒た

ちが理解し、主体的に獲得していくことのできる内容は少なくないと思われる。今後、レポート作成に当たり、学芸員に積極的に質問し、自分一人だけではなく、「人」から学ぶことの重要性を示唆するように心がけたい。ただし、その結果、生徒が自らテーマを設定し、理解しようとする努力が極端に軽減されてしまうことには留意しなければならない。せっかくの機会が、新たな受け身の場を作るのでは意味がなくなってしまうからである。(水谷)

## 6 「地元」から学んでいることの成果

「みんなで一緒に行くコース」に参加した生徒をはじめ、レポートに目を通すなかで気付かされたことに、自分の両親や祖父母など、世代間の記憶をさかのぼる形で、地域の歴史を理解していることが挙げられる。そこで次に、世代間の記憶をさかのぼることも含め、「地元」から学んだ成果を読み取ることができるレポートを取り上げてみたい。そうした観点から、レポートを読み直すと、全 192 名のうち、その 9 割に当たる 175 名のレポートは、詳しく地元の歴史を調べ、その発展に貢献した人物を的確に選んでいる。逆に言えば、成果が読みとれないものは、対象とする人物(および人々)の選び方に無理があったと思われる。例えば、その地域に住んでいた実業家や文学者を取り上げているものの、ただ業績や代表作を年表風に書き連ねるだけで、地元とのつながりや地域への貢献がまったく意識されていない、という具合である。まずは、世代間の記憶をさかのぼることができているレポートの主な事例として、次の 4 件を見ていこう。

### 例①自分の地元「葛飾区」、訪問施設「葛飾区郷土と天文の博物館」

貢献した人物「青山士」

私は 7 月 16 日の月曜日に「葛飾区郷土と天文の博物館」に行きました。そこではその名前の示すとおり、大きく 2 つのテーマで構成されていました。私は「郷土史」のフロアを見学しました。「郷土史」のフロアでは、私たち家族も住んでいる葛飾区に関する文化遺産、資料をもとに、自然、生活、文化、産業の移り変わりを学びました。「郷土史」のフロアもまた 3 つのテーマにわかれています。1 つ目は水との深いかかわりがある中で育まれてきた、「かつしか」の風土を紹介していました。江戸時代、今の水元公園という場所を水源とする「かわしものわりようすい上下之割用水」が作られ、農業に使われていたということや、昭和 22 年にカスリン台風が発生してすごい被害をうけたこと、そして何より葛飾区は昔から水害が多いということを学びました。その展示場所に青山士さんの紹介がありました。

2 つ目は古墳時代から室町・戦国・江戸時代へと郷土かつしかの歴史をさぐる場所です。そこには大嶋郷の時代の奈良正倉院に伝わる養老 5 年の下総国葛飾郡大嶋郷戸籍、

その前夜の古墳時代の埴輪などが展示されていました。また、室町・戦国時代の葛飾城跡から出土した戦国武将の生活を偲ばせる遺物の展示もありました。

3つ目は昭和30年代の民家と工場が再現されていました。葛飾の戦後の花形産業であったボルト・ナット工場の中にはたくさんの機械があり、奥の方にはボルトがたくさんありました。民家にはお茶の間にテレビもあり、昔の番組が放送されていました。また、昔のトイレや扇風機、冷蔵庫、そして車もありました。民家の庭には、洗濯板もあったし、剣玉やメンコ、ベーゴマがおいてありました。私の父も「小さい頃はよくこういう玩具で遊んだなあ…」と懐かしそうに言っていました。当時の居酒屋の定番のメニューもあり、おもしろかったです。

#### 例②自分の地元「文京区」、訪問施設「文京ふるさと歴史館」

##### 貢献した人物「中島歌子」

文京は教育と学問のまちである。その源は、5代将軍徳川綱吉が湯島に移した聖堂にある。幕府の学問所である聖堂とともに、文京地区の大名屋敷内には、江戸邸内学校＝藩士の学校＝藩校があった。また、お坊さんの修行所＝梅檀林もあった。ほかに、庶民の寺子屋や私塾も多かった。

江戸時代、さまざまな形で行われた教育と学問の成果が明治以降文京の地が文教のまちとして発展する力となった。その中で私のひいひいおばあちゃんについて調べた。

私のひいひいおばあちゃん、中島歌子<sup>\*12</sup>は弘化元年（1844）12月14日、父・中島又座衛門＝母・いくの長女として坂戸市森戸で生まれた。幼名を「とせ」といい、少女期は江戸小石川（現、文京区）で、両親が経営する旅館（池田屋）で暮していた。嘉永6年（1853）水戸徳川家の分家、常陸府中藩主松平家水戸屋敷の奥勤めにあがる。文久元年（1861）水戸藩士（勤皇派・天狗党）林忠左衛門と結婚するが、夫は幕末の水戸藩内の争いによって捕われの身となってしまった。その後、25歳の若さで牢屋で亡くなっており、わずか3年で結婚生活は終わってしまった。慶応元年（1865）、22歳でひとりになった歌子は加藤千波の弟子になり、生活のため、書や和歌を一生懸命勉強する。やがて、その才能は開花し、和歌の指導者となって、34歳のとき、江戸小石川に和歌の塾「萩の舎」をひらいた。このとき名前を「うた」から「歌子（現在のペンネーム）」にあらため、最もかがやいた時代をむかえる。

「萩の舎」の運営はたいへんでしたが、少しずつ生徒がふえ、華族や名士の夫人、令嬢などで、多いとき生徒の数は1000人をこえていたといわれている。その中には、「たけくらべ」や「にごりえ」などの作品で有名な樋口一葉もあり、師匠として大きな影響を与えた。

のちに、税所敦子、鶴久子と並んで、明治初期の3女流歌人といわれるようになった。明治34年（1901）、58歳のとき、「萩の舎」の実績が認められ、日本女子大学の教授にむかえられた。明治36年（1903）、60歳のとき、肺炎で亡くなり、東京都上野の谷中墓地でねむっている。この谷中墓地には、私のおばあちゃんやひいおじいちゃんなども一緒にねむっている。

例③自分の地元「目黒区祐天寺」、訪問施設「めぐろ歴史資料館」

貢献した人物「倉方英蔵」

私は、地元祐天寺に生きた倉方英蔵さんについて調べた。倉方英蔵さんは私の曾祖父の弟、大叔父にあたる方だ<sup>13</sup>。1906年12月19日東京都目黒区祐天寺に生まれ、1995年（平成7年）2月14日に亡くなった。目黒区祐天寺、碑文谷、世田谷区上北沢の地で、柿、桃、栗、ナシなどの果実を、よりおいしく、より虫に強く、より大きく、より日持ちするようにと品種改良に打ち込み、「倉方甘柿」、「倉方黄桃（倉方早生）」、「倉方甘栗」といった新しい品種をつくった。きっかけは、アメリカの缶詰のように日本でもおいしい缶詰をつくりたいという考えからだった。戦前は韓国で、缶詰に使う果実の新種研究をしていたこともあった。そのとき持ち帰った種子と戦後拾った種子で研究をかさねてきたのだが、「倉方甘柿」となった。また、「倉方黄桃」という桃は、長生種（タスカン×白桃）に実生（ゴム質の早熟種）を交配して育成した。これは、南米アルゼンチンにまで広がっているという。

当時、大学の研究室や試験場などでも品種改良の研究は行われていたが、倉方さんは仕事をしながら、個人で研究を重ね、これらの品種の特許をとり、果実の栽培の発展に貢献した。

例④自分の地元「大田区大森、西馬込地区」、訪問施設「大田区立郷土博物館」

貢献した人物「村岡花子」

私が訪れた歴史館は、大田区立郷土博物館という所です。私が住んでいる町の近くには、馬込文士村という場所があるのですが、そこでは大正末期～昭和初期にかけて、多数の小説家、詩人、画家たちが住んでいました。その方々の作品や原稿、遺品、使っていた物などが展示してありました。私は、全ての人々の思い出の品々を見てまわりました。その中でとても印象的だったのは、北原白秋が住んでいた部屋の窓でした。とても大きなガラスを縁取っているのは木で、緑色に色付いていて、落ち着いた窓でした。北原白秋は、高台にある赤い屋根の洋館から、この窓を通して美しい景色を眺めていたのだと思うと、窓を見つめているだけで、その時の北原白秋の気持ちがわかった気がしま

した。北原白秋は、東洋英和の校歌を作詩した事で、学校と関連があります。もう一人関連のある人がいて、その方は、この学校の卒業生の村岡花子です。村岡花子は、戦時中に「赤毛のアン」を最初に翻訳した人です。戦争中は、アメリカやイギリスなどの国の文化や本は、とても厳しく取りしまられていて、見つかったらどうなるかわからない時代でした。しかし、彼女は友人のミス・ショーからたのまれた「アン・オブ・グリーンゲイブルズ」を翻訳するために、外にもれないようにおおいをした電灯の下で作業を行ったり、空襲にあった時には、原稿用紙を持って防空壕に逃げたりして、命がけの翻訳をしたのでした。戦争中に敵国の本を翻訳する事はとても大変だったでしょう。しかし、「赤毛のアン」の翻訳原稿を見てみた所、大変でも、苦しくても、村岡花子が翻訳を楽しんでいた事がわかりました。この博物館では、東洋英和に関連する二人の文士に出会えて、とても良かったです。

以上4件のうち、例①の生徒が自分の居住地に対する意識を、「私」ではなく「私たち家族」と表現している点に注目したい。そうした意識の持ち方が「地元」の歴史を長期的に捉える視座を提供している。その結果、「地元」の風土が「水との深いかかわり」の中で育まれてきたこと、それゆえに「水害が多い」土地柄であること、また「戦後の花形産業」であったボルト・ナット工場が立ち並ぶ景色など、その特色がよくレポートされている。そして、一緒に見学を訪れた「父」が子どもの頃に遊んだ剣玉やメンコなどを見て、幼少期の思い出を懐かしく語ってくれることで、生徒本人は直接体験していない「地元」の歴史が、「家族」の存在を通して「追体験」されているのである。

それに対し、例②・③は、開学当時、欧化主義の時代思潮のもと、岩倉具視や伊藤博文ら政府高官の家の令嬢たちが通う、「華族の女学校の役割を果たしていた<sup>14)</sup>」ことで知られる東洋英和女学院ならではのと言えるだろうか、身内に「地元」の発展に貢献した歴史上の人物がいる場合である。それぞれに身内だからこその思いが込められたよいレポートになっている。また、幼稚園・小学部から東洋英和に通い続けている生徒のうちには、例④のように、英和の存在それ自体を「地元」として認識しているレポートも見られた。彼女の目には、馬込文士村にいた他のどの小説家や画家よりも、北原白秋と村岡花子の姿が強く映し出されている。「東洋英和に関連する二人の文士に出会えて、とても良かった」という最後の言葉からもわかる通り、「地元」＝「東洋英和」という認識が示されている。では次に、「地元」とのつながりがよく意識されているレポートの主な事例として、次の5件を挙げてみたい。

例⑤自分の地元「世田谷区」、訪問施設「世田谷区立郷土資料館」

貢献した人物「斎藤寛斎」



2012 年 7 月 19 日木曜日、私は世田谷区郷土資料館という所に行った。

1 階には、世田谷区に関する本の閲覧コーナーや、玉川上水木樋という、江戸時代に江戸市民への飲料水供給目的で使われた大き樋が展示してあった。また松原羽根木遺跡から出土した縄文時代の炉体土器や、堂ヶ谷遺跡から出土した縄文時代の炉体土器なども展示されていた。

2 階には、世田谷の用水についてや、世田谷の年中行事などの展示があった。現在もなお行われている“世田谷ボロ市”は、江戸時代くらいから行われていたことが分かった。また私が今住んでいる、成城学園前や、その他世田谷のたくさんの場所で、横穴式の墓がたくさん発見されたり、砦周辺では、古墳も見つかったそうだ。さらに、野毛大塚古墳では巨大な石棺が発見された。

#### 例⑥自分の地元「世田谷区」、訪問施設「世田谷区立郷土資料館、大場代官屋敷」

貢献した人物「大場弥十郎」

私は 7 月 31 日に、世田谷にある世田谷区立郷土資料館に行ってきました。郷土資料館は大場代官屋敷の敷地内にあります。大場代官屋敷は江戸中期以来、彦根藩世田谷領 20 ヶ村の代官を世襲した大場家の役宅です。郷土資料館は、昭和 39 年に開設された都内最古の公立地域博物館です。世田谷区に関する古文書、考古資料、民俗資料などを収集・保存し展示・公開しています。(中略) 私が興味をもった展示は、「招き猫と豪徳寺」と「蛇と奥沢神社」についての話です。(中略)

「蛇と奥沢神社」は私の住んでいる地域にある神社の、伝統的な行事についてのことです。江戸時代、変な病気が村中にはやって、村の人は大変苦しみ、死ぬ人もありました。ある日、名主さんが夢をみました。空一面の雲の中から八幡さまが現れて、「これ名主、ワラで大きなへびを作って村中をまわりなさい」といって、スーッと消えたという内容でした。最初はみんな反対したのですが、一応つくろうという話になり、村中をへびをかついで練り歩き、神社にまつたら、しばらくして病人がいなくなり、伝統になったという話です。練り歩く姿は私もよくみているので、そのことにまつわる話を知ることができて、よかったです。

#### 例⑦自分の地元「千葉県松戸市二十世紀ヶ丘」、訪問施設「松戸市立博物館」

貢献した人物「松戸覚之助」

二十世紀梨を発見し、松戸市に貢献した松戸覚之助について、焦点をあてます。今、日本で栽培されている梨の 85% が松戸覚之助が発見した二十世紀梨の血縁品種で占められています (三水…新水・幸水・豊水など)。この二十世紀梨は、外観・

品質共に優れ、豊産性であり、貯蔵性もあることから、青梨の中では唯一の優秀品種といわれています。（当時、最高品種といわれていた長十郎の5～6倍の値段で売られていた。）そのことから、「二十世紀梨に優る梨はなし」という言葉が生まれたそうです。また最近では、輸出梨として27億2300万円の輸出額を上げています。国際的にも高い評価を受けて、イギリス・ロンドン市で開かれた、日英大博覧会に日本代表として出品され、東洋種としてナシ界の最高名誉を受けるなど、重要な品種となっています。産地も鳥取、長野、福島、福岡、熊本、大分、新潟、佐賀、岡山などに広がりを見せ、生産量を増加させました。

昔、松戸は米・麦を作れる土地が少ししかありませんでした。しかし、「果樹は、山や荒地にも作れる」と覚之助は考えて、梨やぶどうの栽培を広めるため、苗木も作ることにしました。農業に熱意のある人々が読む雑誌に広告を出したり、新品種を次々に発表したりして、その名を全国に知られるようになりました。覚之助が有名になるにつれ、県知事をはじめ、園芸農業関係の人々が来客し、そのたびに村役場で田舎のがたがたな道を直したそうです。その覚之助の人格の良さに人々は「道路の神様」と言いました。

二十世紀梨が発見されたことによって、日本ナシのルーツの手がかりとなっています。これまで日本ナシは「日本に自生するヤマナシから改良された」という学説がほぼ半世紀にわたり定説となっていました。しかし、研究を重ねてみると、葉の中に含まれる「フラボノイド」という特殊な化合物を分析してみると中国の秋子梨と日本のイワテヤマナシの遺伝的影響が送りこまれている可能性が考えられるようになるだけでも、日本ナシのルーツの発見に大きく貢献をしたことになる。日本ナシとは中国のものか、朝鮮半島のものなのか？二十世紀梨と、それを見つけて世の中に広めた松戸覚之助は、地域にも学術的にも役立っている。

例⑧自分の地元「新宿区」、訪問施設「新宿区立新宿歴史博物館」

貢献した人物「夏目漱石」

私の地元である新宿で貢献した人物は、有名な夏目漱石です。夏目漱石は、新宿に生まれ、新宿で亡くなった人物です。夏目漱石は、松山を舞台として知られる『坊っちゃん』の作品の中に、新宿の地が書かれています。『坊っちゃん』の舞台は松山ですが、新宿が直接舞台となっているものが数多くあります。また『道草』をはじめ、『それから』『硝子の中』『彼岸過迄』『三四郎』『明暗』『野分』など断片的な記載箇所も含めるとその数はもっと多くなります。

近年、文学作品は都市を読むテキストとしても大きく評価され、その代表的論者である

前田愛氏は夏目漱石を「東京という都市空間そのもののしたたかな探索者」（『都市空間のなかの文学』）と高く評価しています。実際に漱石は散歩などで外出し、様々な場所を観察していました。その様子は日記などからうかがうことができます。また、その日記を見てみると、『それから』の主人公が神楽坂で出会う地震は、明治 42 年 3 月 14 日、漱石が実際に神楽坂で体験しており、これが作品に組み込まれたことがわかります。戸山、大久保などは日記の中にも散歩のコースとしてたびたび登場します。漱石にとって散歩とは自らの作品の取材でもあった訳です。つまり、漱石の作品に登場する新宿を通して、当時の新宿の様子がわかってくるということです。

#### 例⑨自分の地元「神奈川県川崎市」、訪問施設「川崎市民ミュージアム」

貢献した人物「持田春吉」

7 月 28 日に等々力競技場横にある川崎市民ミュージアムに行きました。「郷土・川崎を掘る」という展示を見ました。川崎考古学研究所の活動で発見された川崎市内の遺跡が中心の展示でした。

遺跡とは、地面の下に残った昔の人々の生活の跡のことです。地表から 1.5 m 掘ると縄文時代の遺跡が発見され、その下は赤土（関東ローム）で旧石器時代の遺跡が発見されます。集落や貝塚・古墳・埴輪・窯などが主な発掘品です。発掘された物の種類や特徴によって、今生活しているこの土地に何時代の人々が生活していたのかがわかるということに一番興味を持ちました。

高津区、宮前区、多摩区、麻生区内にある遺跡は全部で 600 ヶ所あります。その中で私が詳しく調べた遺跡は、川崎市高津区梶ヶ谷神明社上遺跡です。この神社の前の道をよく通っていたので、とても昔の人たちが身近に感じたからです。この神社からは弥生時代中期を主体とする竪穴住居が発見されています。30 個体を超える土器が出土し、そのうち器形が残っていたのは 20 個体です。展示会では、土器の一部が出土し、他はねん土などで再現している物がほとんどでした。そのため全体の器形がわかる土器がそんなに多いと知り、おどろきました。この遺跡は鉄器と鉄斧片が発見されたことで注目されました。私は、鉄が出土するということは位が高い人が生活していたと考えられるから注目されたのだと思います。また、相当数の竪穴住居があったことから集落があったと推測されています。弥生時代中期という時期から考えて環濠集落であったという可能性もあるとも考えられます。

他にもいろんな場所からの出土品が展示されていました。その中で私が注目した物は、食器やまが玉や剣です。食器は、杯や供え物用の物がありましたが、他は現代で使っているような皿が多くありました。それを見て、使いやすい皿の形など考える事は

同じなんだと思いました。まが玉は、現代でも見たことがある物だったため、興味をもちました。現代では装飾品として利用されていますが、昔は違っていたと思います。位を示す物、宗教的な物として使っていたのだと思います。剣は、とても形が残っていました。さやの部分がついている剣が多く、おどろきました。私が住む土橋や近くの鷺沼にも遺跡がありました。鷺沼遺跡を発見し、大昔の人々の生活に興味を持った人が、持田春吉さんです。この方については課題②で詳しい説明を述べます。

この展示を見て、今私が暮らすこの場所で確かに大昔の人々が生活していたのだと知り、とても身近に感じることができました。教科書でしか見たことのないすごく遠い人だと思っていた人々の生活の跡を見て、歴史のおもしろさを感じ、とても感動しました。

私がこの展示を見て注目した人は、農民考古学者である持田春吉さんです。古代からこの同じ地で生活をしてきた、先人に想いを馳せ、川崎の地を掘り続けた方です。持田さんはもともと考古学を研究していた人ではありません。川崎市宮前区で農業を営んでいました。考古学に興味を持つようになったきっかけは、終戦ときに山林を開墾し畑を耕していた時のことでした。当時、食料不足で主食のサツマイモやジャガイモなどの根菜類を作ることが多かったようです。開墾した場所の隣の畑で発見されたのが鷺沼遺跡です。30 cmほど掘った所で遺跡が見つかりました。発掘された石器や土器を並べられた光景を目にした時、大昔の人々の生活を想像し、初めて考古学に興味をもちました。50 以上もの遺跡の発掘調査をした中で印象に残っている遺跡は鷺沼遺跡だそうです。

鷺沼遺跡を発見した頃から持田さんは遺跡好きな人と集まり始めました。宮崎古代文化研究所から始まり、高津図書館友の会、郷土史研究部へ発展しました。仲間と共に宮前区と高津区の台地を回って歩き、何時代の遺跡がどこにあるかを地図に印をつけていくという地道な作業から考古学人生が始まったそうです。地図を作るうちに、今まで防空壕やゴミ捨て場として利用していたものが横穴墓だとわかり嬉しくなったのだと思います。他にも集落や古墳の発掘調査などを行い、出土品が増え、設置されたのが川崎考古学研究所です。ここでは、土器を洗い、乾燥させて接合し、実測図をとって報告書を出す、という行程が行われました。また、土器づくりにも励んでいました。使う粘土の調達から焼き上げるところまで全ての行程を勉強しました。焼くのは野火で行うため、土の固さなど研究に研究を重ね、納得のいく縄文土器を作り上げました。昔の人の土器により近づくことだけを考えていたようです。

50ヶ所を超える発掘調査では、旧石器時代の大昔の人々の生活の跡まで見てきたそうです。川崎考古学研究所の所長を務めた持田さんは1980年（川崎考古学研究所開設の翌年）に川崎市文化賞を受賞しました。持田さんの半生にわたる川崎市内の発掘調査による出土品は膨大な数になります。

以上5件のうち、例⑤・⑥は、いずれも「世田谷ボロ市<sup>\*15</sup>」や「大蛇お練り<sup>\*16</sup>」といった「地元」の生活に定着している祭礼などの伝統行事を取り上げたものである。なかでも⑥は、奥沢神社にまつわる「大蛇お練り」の言い伝えを詳細にレポートし、自分自身もよく見に行っている伝統行事の歴史を知ることができて「よかった」と記している。

続く例⑦は、「二十世紀梨」の発見者である松戸覚之助が「地元」の発展に貢献していたことを取り上げている。穀物の栽培に向かない痩せた土地柄の松戸を果物の「梨」によって発展させたことに加え、「二十世紀梨」が現在日本で栽培されている梨の85%のルーツであり、さらには「日本ナシのルーツ」を探す手がかりにまでなっていることが興味深くレポートされている。

また、例⑧では、「地元」＝新宿に生まれ、新宿で亡くなった文学者・夏目漱石が取り上げられ、彼の作品の「舞台」として登場する「地元」の姿に関心が寄せられている。「文学作品」を単なる読み物として終わらせず、「都市を読むテキスト」として再評価する研究者の言葉<sup>\*17</sup>を借りながら、漱石の散歩コースと自らの「地元」の歴史を重ね合わせて捉えようとする姿勢が見受けられる。

最後に例⑨は、「地元」の遺跡に関する展示を見学し、考古学の発掘により、「今生活しているこの土地に何時代の人々が生活していたのかがわかることに一番興味を持ちました」と記している。このレポートの特色は、鉄器やまが玉などの出土品について、単に説明を読んで情報を受け取るだけに止まらず、そこに自分なりの意見や解釈を加え、歴史的な事物をより身近な存在に引き寄せて理解する力に満ちあふれていることである。その姿勢は、「地元」に貢献した人物として農民考古学者の持田春吉という人物<sup>\*18</sup>を選択したことにも顕れている。持田氏が考古学仲間とともに行った「地道な作業」を詳細にレポートするなかで、「地図を作るうちに、今まで防空壕やゴミ捨て場として利用していたものは横穴墓だとわかり嬉しくなったのだと思います」と、人物の気持ちを代弁するような表現を用いている。この例⑨は、「地元」とのつながりがよく意識されているレポートの中でも、特に秀逸な作品として評価できるだろう。（水谷）

## 7 むすびにかえて

これまで積み重ねてきた考察により、私立学校の中学生であっても、夏休みにおける課



題の設定の仕方を工夫すれば、郷土学習は十分に可能であることが分かった。また、教科書に載るような歴史的人物だけでなく、郷土に貢献した人物を生徒自ら探し出すことも十分にできる。特に学芸員等の存在を事前に知らせておくことによって、学習を深めることが可能であることも分かった。来年度は、事前に学芸員への質問を考えさせるように指導を改善したい。

実は今回の課題の最も工夫した点は、「地元」の歴史に貢献した人物（または人々）と生徒本人との「手紙」の往還をさせたことである。その「手紙」の往還について分析すると、歴史上の「人物」になりきれていない生徒は、192 名中 20 名ほどであった。つまり良く書けていたと評価できるものがほとんどであった。また生徒のレポート提出後の反応を見ると、この「手紙」の往還に最も興味を示していた。

「地元」の歴史に貢献した人物から現在の自分に向けての手紙と、現在の自分から「地元」の歴史に貢献した人物への手紙の往還という、架空の「手紙」を書くことを通して、生徒たちは「現在」から「過去」を理解するだけでなく、「過去」から「現在」を理解することの難しさと大切さを実感し、歴史との向き合い方を学ぶことができたのであろうか。さらに、このような学習方法を通じて、生徒自身の現在に対する認識や理解のあり方に変容を与えることは可能であったのだろうか。よく書けていただけて、学び方を学ぶことができたか、認識や理解に変容を与えたかは、一回限りの課題では分析できなかった。このあたりのことについては、生徒たちの成長を追いながら、継続して研究することとする。生徒たちの成長を追いながら研究ができるのは、実際に現場で指導している現職教員を含む研究ならではである。またこの研究を継続することこそ、新学習指導要領改訂の柱と言える「言語活動の充実」を目指す授業実践の深化であり、生徒の学力保障にもつながると理解している。（坪井）

## 注

- \*1 中学校学習指導要領解説 社会編（2010 年 9 月）を参照した。
- \*2 2007 年のいわゆる教育三法改正で学校教育法が改正されたが、そのなかで「義務教育の目標」（21 条）が新設されたことは注目に値する。「郷土の現状と歴史について、正しい理解に導く」は、「義務教育の目標」10 項目のうちの一つである。
- \*3 中学校社会科での博物館等を活用した学習活動は、平成元年告示の戦後第 6 次となる学習指導要領で初めて規定された。歴史的分野の内容の取扱いで「日本人の生活や生活に根ざした文化については、各時代の政治や社会の動き及び各地域の地理的条件、身近な地域の歴史とも関連付けて指導するとともに、民俗学などの成果の活用や博物館、郷土資料館などの文化財の見学・調査を通して、生活文化の展開を具体的に学ぶ

ことができるようにすること」とされた。

- \*4 本稿では、郷土と地元は同義である。生徒たちには、わかりやすい「地元」という言葉を使用して学習活動を説明した。
- \*5 これらの試みに関しては、坪井・水谷「中学校社会科教育における歴史的分野と公民的分野の接続に関する授業検証研究―「大正デモクラシー」を事例として―」（『東洋英和女学院大学 大学院紀要』9号、2013年3月）を参照されたい。
- \*6 東洋英和女学院 中学部「シラバス（授業計画）2012 中学部1年」p.10。
- \*7 この時鑑賞したのは、「未来への虹―ぼくのおじさんは、ハンセン病―」（企画・製作：法務省人権擁護局、財団法人 人権教育啓発推進センター／制作：共同映画株式会社、株式会社マジックバス／監督：四分一 節子／監修：神 美知宏（全国ハンセン病療養所入所者協議会事務局長）、平沢 保治（多磨全生園入所者自治会会長）、2005年）である。この作品は、国立ハンセン病資料館の語り部である平沢保治さんをモデルにして描かれた子ども向けの本「ぼくのおじさんは、ハンセン病―平沢保治物語―」をもとに、ハンセン病問題を正しく伝えるために制作されたアニメーションである。
- \*8 平沢保治「故郷への道」（社会福祉法人 ふれあい福祉協会『ふれあい福祉だより』第7号 2010（2010年5月）を参照した。
- \*9 ハンセン病および近代日本におけるハンセン病の歴史に関しては、多磨全生園入所者自治会発行のパンフレット「正しく学ぼう！！ ハンセン病Q & A」（2012年1月）を参照した。
- \*10 国立ハンセン病資料館の展示に関しては、国立ハンセン病資料館編集の『国立ハンセン病資料館 常設展示図録 2009』（2010年3月）を参照した。
- \*11 多磨全生園に関しては、全生園入所者自治会発行のパンフレット「人権の森 緑のしおり～隠れた史跡めぐり」（2009年9月）を参照した。
- \*12 提出した生徒とは苗字は異なる。
- \*13 提出した生徒とは苗字は異なる。
- \*14 東洋英和女学院『東洋英和女学院百年史』（東洋英和女学院百年史編纂実行委員会、1984年）第一章第二節を参照した。
- \*15 世田谷区立郷土資料館編『ボロ市の歴史』改訂版（世田谷区立郷土資料館、2011年）によれば、世田谷ボロ市は、毎年1月15・16日、12月15・16日の4日間、世田谷線の世田谷駅と上町駅の間で開催されている。生徒のレポートには「江戸時代くらい行われていた」と記されているが、正しくは、天正6年（1578）に小田原城主の北条氏政がこの地に楽市を開いたのが始まりである。当初は古着や古道具などを持ち寄ったことから「ボロ市」という名前がついたとされるが、現在では骨董品や古本、

中古ゲームソフトなどを売る露天もあり、代官屋敷のあるボロ市通りを中心に、約700店の露天が所狭しと並び、毎年多くの人々で賑う、400年以上の歴史を有し、世田谷を代表する伝統行事である。

- \*16 世田谷区立郷土資料館編『世田谷の歴史と文化:世田谷区立郷土資料館展示ガイドブック』（世田谷区立郷土資料館、2005年）を参照した。
- \*17 レポート文中の前田愛『都市空間のなかの文学』は、1982年に筑摩書房より出版されている。
- \*18 持田は現在も精力的に研究を続けており、近年では、日本考古学会編『考古学雑誌』95（3）に、村田文夫との共著で「高師小僧と同製管玉の事例」（日本考古学会、2011年3月、pp.302～311）を発表している。

# Cooperation between a Junior High School and a Museum in Implementing the New Course of Study: Deepening Knowledge of One's Own Hometown

## Abstract

A deeper study of tradition and culture is thought to be important in the new course of study set by the Ministry of Education for junior high school students in Japan. How can this be achieved in social studies education? One answer to this question was proposed by Ryuta Tsuboi, a researcher of social studies education, and Satoru Mizutani, a teacher at Toyo Eiwa Junior High School. They devised a homework assignment in the form of a study report, gave the assignment to 192 seventh grade students, and evaluated the reports submitted by the students.

From the results it was found that a deeper study of tradition and culture can occur in social studies education by implementing such a study report as an assignment. Students not only learned about the historical characters that appeared in their textbooks, but also discovered information about other persons who had contributed to their hometowns. Furthermore, by requiring students to visit local museums, notifying the curators of the museums ahead of time, and requiring students to ask the curators for more information about their particular topics of interest, students' learning was deepened even further.

執筆者

坪井龍太 TSUBOI Ryuta 准教授 Associate Professor 公民教育論 Civic education

水谷悟 MIZUTANI Satoru 教諭 Teacher 社会科教育 Social studies